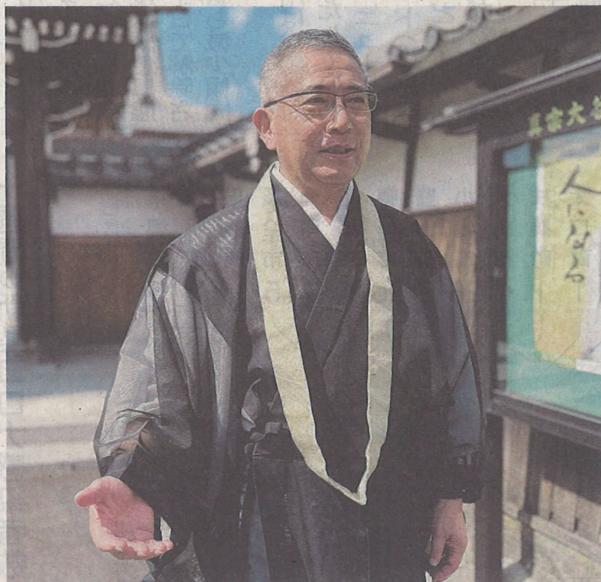


## ハンセン病隔離に抵抗 あま出身医師の生涯



「コロナ禍の今こそ見てほしい」と語る円周寺の小笠原英司住職=あま市甚目寺の円周寺で

# コロナ禍の今こそ見て

戦中戦後にハンセン病患者の強制隔離に抵抗したあま市出身の医師小笠原登（一八八八—一九七〇年）の生涯を振り返る映画「一人になる」が、県内で初めて名古屋市中区の映画館「伏見ミリオン座」で上映されている。生家である円周寺（あま市甚目寺）の小笠原英司住職（六四）は「病気の人への差別という過ちを人間は繰り返してしまう。コロナ禍の今だからこそ見てほしい」と話す。

（森若奈）

円周寺では、漢方医だった小笠原医師の祖父の代からハンセン病患者を診察していた。小笠原医師自身は現在の京都大病院で治療

に取り組み、一九二一年、ハンセン病が「不治の疾患である」「遺伝病である」「強烈な伝染病である」という当時の言説を「迷信」

た。カンパを原資にして、神戸市の映画監督高橋一郎さん（今年六月に逝去）と共に、小笠原医師の生涯とハンセン病の歴史を振り返る映画を作り上げた。円周寺のほか、小笠原医師が最後に勤務した鹿児島県奄美市でも撮影した。診察を受けた元患者や国の責任を問つ訴訟に携わってきた徳田靖之弁護士のインタビューなどとともに、役者が当時の診察の様子を再現するシーンもある。

## 名古屋で上映中 生家の住職らが映画化に尽力

名古屋で上映中 生家の住職らが映画化に尽力  
「コロナ禍の今こそ見てほしい」と語る円周寺の小笠原英司住職=あま市甚目寺の円周寺で

事務局長訓霸さん（左）=090（1587）6255へ。

円周寺のほか、小笠原医師が最後に勤務した鹿児島県奄美市でも撮影した。診察を受けた元患者や国の責任を問つ訴訟に携わってきた徳田靖之弁護士のインタビューなどとともに、役者が当時の診察の様子を再現するシーンもある。

小笠原住職は「タイトルのように『一人になる』ことは人間にとつて難しい。それでも小笠原登はなぜ、同調圧力に屈せず、医学的知見を基に国策に反対できただのか。そういうところを見てほしい」と訴える。

小笠原住職らは、名古屋市やあま市での自主上映も計画している。ミリオン座での上映は七日まで。自主

だと否定する論文を発表した。国策に一人であらがつた医師の存在を知つてほしいと、小笠原住職（真宗大谷派関係者）が一年前に映画の製作実行委員会を立ち上げた。カンパを原資にして、

神戸市の映画監督高橋一郎さん（今年六月に逝去）と共に、小笠原医師の生涯とハンセン病の歴史を振り返る映画を作り上げた。